

水痘带状疱疹ウイルス動脈周囲炎の一例

大崎 駿、橋詰 典弘、渡邊 孝太、
村瀬 悠也、相原 麻琴、梅景 知大、
藤岡 亜門、北川 嵩之、上野 涼太、
藤澤 英文

昭和医科大学横浜市北部病院 放射線科

症例は69歳、女性。心窩部痛と嘔気を主訴に近医受診。症状改善なく当院紹介入院となった。

入院当日の造影CTでは腹腔動脈周囲に脂肪組織濃度上昇を認め、胃小弯側や肝門部リンパ節の腫大を伴っていた。入院6日後FDG-PET/CTで腹腔動脈周囲に $SUV_{max} = 4.53$ のFDG集積を認めた。同日に水痘ヘルペスIgMの陽性が確認され、水痘带状疱疹ウイルス動脈周囲炎としてアシクロビルが投与された。その後は明らかな皮疹の出現もなく、心窩部痛は改善傾向であった。

水痘带状疱疹ウイルスは初感染時には水痘を発症し、神経節に潜伏する。その後、宿主の免疫低下等が契機となり再活性化する。画像所見としては、CTで腹腔動脈や上腸間膜動脈周囲の脂肪組織濃度上昇が報告されている。今回我々は水痘带状疱疹ウイルス動脈周囲炎の1例を経験したので、画像所見を中心に文献的考察を加えて報告する。